広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「二十年代派」作家ディモステニス・ヴティラスの多様性
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 27 : 31 - 44
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051902
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

「二十年代派」作家ディモステニス・ヴティラスの多様性

橘　孝司

國立臺中科技大學應用日語系　助理教授

0. 最初の出会い

現代ギリシャ文学史上重要な作家の一人にディモステニス・ヴティラスという人がいる。筆者が初めて読んだ作品は「他の死体 Άλλα κουφάρια」や「神々の崩壊 Το γκρέμισμα των Θεών」だった。前者は浜辺で宝探しをする男たちが次々に頭蓋骨を掘り当ててしまうポオ風のグロテスクな物語、後者は歴史小説のように始まりながら人喰い人種の国に迷いこむ奇想譚だった。そのような出会いをしたために、ヴティラスは反リアリズムで幻想文学の作家だという印象を抱いていた。ところが、現代ギリシャ文学史では、20世紀前半（特に1920年代）に都市の小市民層の厳しい生活をリアルに描いた作家、とされている（Politis, 1973:213-4）。どうも筆者の印象とは真逆の作風に見える。

本稿は、筆者がこの同一作家の中に感じた作風の大きな振れ幅を何とか理解しようと試みるものである。内容は二つの部分に分かれる。前半では、いまだわが国で知られることの少ないこの作家のプロフィールを紹介する。ギリシャにおいて毀誉褒貶の激しかった作家であり、二十世紀終わりに再評価されたことにも触れる。後半では、ヴティラスがいかにして広範囲のジャンルの作品を書いていったのか、それら全体を貫く共通性といった要素があるのかどうかについて、特に幻想性に注目しながら筆者なりの考えを提示したい。

1. 作家ヴティラスのプロフィール

1.1. 生涯

まず、作家の生涯、文学史上の位置、作品の評価の順にまとめておく。

ディモステニス・ヴティラス Δημοσθένης Βουτυράς（1872-1958）は散文作家として知られる。長編はごくわずかであるのに対し、500 作を超える短編を残

したとされ、典型的な短編作家 διηγηματογράφος である。

1872 年コンスタンチノープルに生まれるが、幼いころ一家でピレアスに引っ越した。中学生の時てんかんのために学校を退学し、自宅で大切に育てられた。父親はもともと公証人だったが、ギリシャに来て建築業・製鉄工場経営に転職している。工場内部の様子などがしばしば作品にも登場する。

1903 年、31 歳で発表した短編「レオニダス・ランガス」が当時の文学界の大物コスティス・パラマスやグリゴリオス・クセノプロスに好意的に受け入れられる。それ以前にも作品を投稿しているが、これが実質的なデビュー作である。

1904 年に結婚し二人の娘をもうける。娘は画家となり、父親の自画像を多く描いた。雑誌や書籍でよく目にするヴティラスの肖像画は彼女の作品である。

1905 年 33 歳の時、事業不振に悩む父親が自殺するという衝撃的な出来事が起こる。生活は激変し、家族を養うために奔走することになった。

二年後、妻とクカーキ地区（アクロポリスの南）へ引っ越す。専業作家として生きていくことを決し、おびただしい短編小説を『ムーサ Μούσα』、『パナシネア Παναθήναια』、『ヌマス Νουμάς』といった雑誌に投稿し続けた。

実際に名前が売れ始めたのは 1920 年の頃からで、短編集も次々と刊行されるようになった。『偶像崇拝神父 Παπάς Ειδωλολάτρης』（1920）、『三十二の物語 Τριανταδύο διηγήματα』（1921）など生涯に 34 冊を出版している。二十世紀の初めから 1950 年代まで長いスパンで執筆し続けた人だが、「二十年代派」と言われるように、この時期が最も活動的だった。

1958 年に 86 歳で永眠。

1.2. 文学史上の位置

次に、ヴティラスの文学史上（散文史ということであるが）の位置づけについて簡単に述べておきたい。

現代ギリシャ散文の嚆矢と言えば、通常 1834 年のパナイヨティス・スツォス『レアンドロス』（書簡体の恋愛小説）が挙げられ、十九世紀の前半は戦争、英雄、恋を長編小説に綴る浪漫派が主流だった。

十九世紀も後半になって、作家たちはギリシャ村落の伝統的生活をリアルに描写しようとする方向に進む。民俗学研究とも相まって、この種の短編小説が急速に増えていった。ヨルギオス・ヴィジイノス、アレクサンドロス・パパディアマンディス、アンドレアス・カルカヴィツァスの三人を代表とする「新アテネ派」である（詩ではコスティス・パラマスがリーダーであった）。

山村や漁村の生活をリアルに描く短編は ηθογραφία（genre story、folkloric realism[1]、「風俗小説」）と呼ばれ、数十年にわたってギリシャ散文の潮流を支配したが、後にはアテネの上流階級の生活を描く方向へ拡張する。グリゴリオス・クセノプロスの長編小説や戯曲がその代表である（この流れは urban realism とも呼ばれる[2]）。さらに 1910 年代にはケルキラ島貴族階級出のコンスタンディノス・セオトキスが旧支配層の没落と新興ブルジョア層との軋轢という社会的テーマを長編小説に取り入れた。

1910、20 年代のギリシャは二度のバルカン戦争、第一次世界大戦、国家分裂、希土戦争、スミルナ大破局、ローザンヌ条約による住民交換、百万人を超える難民と続く激動の時代であり、国の住民構成が変わってしまったのみならず、精神的流動性・不安が蔓延することになった。

そのような社会的背景のなかで、悲観主義とデカダンスの色濃い作品を生み出し続けたのが詩人コスタス・カリオタキスに代表される「二十年代派」である。散文作家としては、コスタス・パロリティスやペトロス・ピクロスが社会主義的イデオロギーの観点から社会の矛盾、階級間の衝突を描いた。ヴティラスもここに含まれるが、村落が舞台だった ηθογραφία の描写対象を、都市の小市民層に移した。ただし、当時の社会問題の観察や展望が不十分だとパロリティスからは批判されている[3]。

その後、西欧の新しい文学潮流に接した「三十年代派」が現れてギリシャ文壇の国際的評価を高めていく。ヨルゴス・セオトカスがこの派のマニフェストたる『時代の精神』（1929 年）を発表し、詩人のリーダー格セフェリスはデビュー詩集『転回点』を 1931 年に刊行する。散文だけでもミリヴィリス、ヴェネジス、カラガツィス、ペンジキスといった作家が綺羅星のように出現し、コスモポリタニズム、伝統と現代の融合、反戦文学、心理主義、歴史小説など様々な方向へと分岐していく。

以上をまとめると、散文作家としてのヴティラスは（特に活動的だった時期に関して）村落の風俗を描く「新アテネ派」とコスモポリタニズムの「三十年代派」に挟まれた世代ということになる。描写の対象を村の伝統的生活から都

---

[1] Beaton (1994:72)の用語。

[2] Beaton (1994:99)の用語。

[3] いわゆる「ヴティラス問題」(Κουνενάκη, 1998:4-5)。ヴティラス『高貴なる近隣』出版後、パロリティスは社会主義イデオロギー面からの弱さを『ヌマス』誌上で批判した。これに対し、クセノプロス、ニルヴァナス、ハリスら文学者がヴティラスを擁護した。

市周辺部の虐げられた庶民、労働者の生活に転換させた点が大きな特徴と言える（Politis, 1973: 213-4）[4]。

1.3. 作品の評価・再評価

最後に、ヴティラス作品に対する評価と再評価を簡単にまとめておく。

ヴティラスが登場した当初、好意的な評価を下したのは、上述のように、コスティス・パラマスとグリゴリオス・クセノプロスだった。新アテネ派の大物詩人パラマスは、ヴティラス作品はメロドラマを期待する読者には向かないが、芸術的感性や独特の倫理観を持つ人の興味を引くだろうとし、アイロニーを込めた巧みな心理観察を評価する（1903 年, Κουνενάκη, 1998:24）。数年後に重要な文芸誌「ネア・エスティア」編集で活躍することになるクセノプロスは、ストーリー叙述の才能には欠けるが、簡潔な描写にすぐれたものがある、と分析的に評している（1920 年, Κουνενάκη, 1998:24-25）。

しかし、その後三十年代派が輩出するとともに、ヴティラスの人気は衰退していく。多くの著作も絶版になってしまった。

再評価されたのは第二次大戦後のことであり、自身作家でもあるストラティス・ツィルカスに負うところが大きい。ツィルカスは 1948 年の批評で、ヴティラスの心理的リアリズムは（十九世紀の小説風に）外部から冷静に観察分析してみせるのではなく、読者を人物の内部へ誘い込み、その心理を追体験させる点でモダニズムにつながると絶賛する（Κουνενάκη, 1998:26-27）。

さらに、重要なのは 1990 年のスティリアノス・アレクシウによるヴティラス擁護である。小市民・労働者世界の特殊な ηθογραφία にすぎない、と片付けられていたヴティラス作品は、実は、安定した伝統的な村落社会から混沌とした多様な都市の生活に視点を移しながら、小市民の心のひだを巧みに描いた点で革新的だった、とする。そして、この作家をより深く理解するためには信頼できる批判的全集が何よりも必要だと結んでいる（Κουνενάκη, 1998:6-9）。

そのような全集の刊行が実際に始まったのは、1994 年からである。ヴァシアス・ツォコプロス（Βάσιας Τσοκόπουλος）が編者となり、2001 年に第 5 巻まで出ている（Δελφίνι 社刊。ただし第 5 巻は Στάχυ 社刊）。現在全体の中ほどで中断している模様だが、完成すれば全 10 巻を超える膨大なものになるらしい。

---

[4] 大都会の貧しい近隣の生活を身近に目にし、その嘆き、絶望、憎悪を描き続けたところから《ギリシャのゴーリキー》と呼ばれた（Ψυχογιού, 2018）。

2. 作家ヴティラスの多様性

2.1. 問題の所在

後半で取り上げたい問題は「ヴティラス作品の多様性はどこから来ているのか？」である。特に冒頭に挙げた、幻想的な作品と（二十年代派の特徴とされる）ペシミズムとデカダンスに彩られた社会派作品とは、ひとりの作家の中でどのようにつながっているのだろうか？

ヴティラス作品の振れ幅の大きさは、次のようなバスコゾスやツォコプロスといった専門家の評価からもうかがうことができる。

「ヴティラスの作品は完全に収まるような美的カテゴリーをみつけるのが困難である。一見してリアリズムだが、詳しく見ると自然主義的描写、浪漫主義、象徴主義の要素もあわせ持ち、さらにヨーロッパの二十世紀初めのモダニズム精神にも貫かれる」（Μπασκόζος, 1999:17）

「ヴティラス作品の広大な領域の中には心理的リアリズム、社会ドラマ、幻想文学、風刺、実存的問題などに分類される短編が見られる。しかし、暗黒文学、恐怖の物語に分類され、ゴシック風スタイルに近接する作品も多い。かなりの研究者が彼の短編をポオのスタイルに譬えている」 (Τσοκόπουλος, 2009:11)

筆者が冒頭で言及した「他の死体」「神々の崩壊」のような作品を、ツォコプロスは上のように「暗黒文学」(μαύρη λογοτεχνία)と呼んでいる。彼の言う「幻想文学」(φανταστική λογοτεχνία)と「暗黒文学」の違いは明確ではないが（引用個所はヴティラス作品の傾向を列挙しただけであり、厳密なカテゴリー分けを目指しているわけではない）、本稿では幻想的でかつ恐怖・戦慄・グロテスクな効果を志向するヴティラス作品群を「幻想暗黒文学」とまとめて呼ぶことにする[5]。

そこで、問題をもう少し絞るならば、広大なヴティラス作品群の中にあって一見両極端に見える「社会派ドラマ（社会的リアリズム）」作品群と「幻想暗黒文学」作品群の接点はどこにあるのだろうか？

---

[5] ツォコプロスはポオ的な意味で ヴティラス作品を「暗黒文学」と呼んでいるが、この語はもともと Θωμάς Γκόρπας, *Περιπετειώδες κοινωνικό και μαύρο νεοελληνικό αφήγημα,* Εκδ. Σίσυφος, 1981 の中で、社会の周辺に位置する浮浪者を描く作品として提案されたらしい（M. Θεοδοσοπούλου による書評 EX LIBRIS: Ο Βουτυράς του φανταστικού (maritheodo.blogspot.com)）。マランゴプロスも後者の意味でヴティラス作品を「黒い魅力 Η μαύρη γοητεία」と呼ぶ（Μαραγκόπουλος, 1998:21）。

本稿では後者から前者へと進む分析の方向を取りたい。すなわち、彼の「幻想暗黒文学」とされる作品を細かく検討することで、「社会的リアリズム」に接近している場合もあるのか、またその場合どのように両者が関連付けられるのか、を検証する方向である。

2.2.「幻想暗黒文学」とは

ヴティラス「幻想暗黒文学」作品を具体的に分析するに先だって、このジャンルの定義を確認しておきたい。

上ではひとまず、「幻想的でかつ恐怖・戦慄・グロテスクな効果を志向する作品」と述べたが、時代により、あるいは作家・作風によって、その包含する内容は様々であり、ジャンルの発展により当然変容してきたことだろう。

中世の「妖精物語」、近現代の「幻想小説」、さらに「SF」を広範囲に概観した論文の中でロジェ・カイヨワは次のように述べる。

「これ【中世の妖精物語】に対し、幻想小説における超自然は、現実世界の内的統一に加わる亀裂としてあらわれる。奇蹟はありうべからざる侵略、脅威的攻撃となって、その時点まで厳然として不久の掟に支配されると見えていた世界の安定を破壊する。
（中略）恐怖に支配された雰囲気の中で展開する幻想小説の方は（中略）不吉なできごとで終わらざるをえない」（カイヨワ 1966: 274、【 】は筆者補足）

つまり、「幻想暗黒文学」とは、安定した《現実世界》に対して、隠れた未知の《異界》の存在を前提とし、後者が突如前者に闖入してくることで引き起こされる恐怖・戦慄の物語、ということになる。

本稿の目的はもとよりジャンル性を理論的に吟味することではなく、ヴティラス作品の分析にあるので、この定義を借りて進めることにする。（詳しくは橘 2017:31ff. 参照）

2.3. ヴティラス「幻想暗黒文学」作品の分析

「暗黒」(μαύρη)の名称を用いた『ヴティラス全集』の編者ツォコプロスは同傾向の作品を集めたアンソロジー『死の船 Το καράβι του θανάτου』（2009、Τόπος 社）も出版している。上記 2.1 の引用はその序論で延べられたものである。

そこで、この『死の船』に収められた短編 13 篇を分析していきたい。「幻想暗黒文学」であるのだから、いずれも何らかの不安や恐怖・戦慄を感じさせる

作品であるというのが大前提であろう。

とは言え、各作品はどうやってこの感覚を読者の心に生み出すのだろうか。もっと言うならば、作品の中で《異界》の要素はどんなふうに提示されるのか。つまり、《現実世界への異界の闖入》という観点からは、《現実世界》と《異界》の実在性の度合い、あるいは二つの世界の関連性はいかなるものとしてとらえられているのだろうか。

この観点から 13 篇を熟読してみたところ、筆者の理解する限りでは、以下の四つのタイプに分類できるのではないかという結果を得た。（題名前の番号は『死の船』収録の順番）。

A「異界の暗示」：7「死への糧 Τροφή στο θάνατο 」

B「夢・幻視」：2「霊の場所 Τόπος ψυχών」、**3**「呪われた道 Ο καταραμένος δρόμος」、**4**「亡霊の戦い Μάχη φαντασμάτων」、**9**「死の船 Το καράβι του θανάτου」

C「心象風景」：6「呪いの町 Η πόλη της κατάρας」、**11**「霊の工房 Ξωτικό εργαστήρι」、**13**「わたしたちはどこに向かっていたのか Πού πηγαίναμε;」

D「現実界の出来事」：1「海へ Στη θάλασσα」、**5**「いつか来る復讐 Η εκδίκηση που θα έρθει」、**8**「運命の手 Το χέρι της μοίρας」、**10**「黒い衣服 Η μαύρη φορεσιά」、**12**「死者の手荷物 Οι αποσκευές των νεκρών」

それぞれのグループをもう少し詳しく論じていきたい。

A：まず、**7「死への糧**」のように、雪の中にたたずむ叔父の屋敷を訪ねた主人公が様々な怪異を体験するという、いかにも《ゴシック風》設定の作品がある（もちろん舞台は英国ではなく、ギリシャのどこかなのだが）。床に垂れる血だの、夜中にドア越しに呼びかける嗄れ声だの、月光の中庭から見上げるガラス玉の目といった、超自然を暗示する道具立てを次々と配して、結末の恐怖へと読者をじわじわと引き摺って行き、「異界の存在」を強く暗示する[6]。

B：次に、ストーリーを現実の世界から出発させながら、《夢》を使うことで、異界との接触を暗示させる作品がある。**2「霊の場所**」では、夕暮れ時にとある廃村を通りかかった語り手たちが村の滅んだ由来を耳にする。幽霊が夜

[6] ただし、この作品では異界の存在は明示にまで行かず、暗示にとどまっている。その一方で『死の船』以外の作品、例えば「幽霊 το στοιχειό」には蜘蛛のような吸血鬼（βρυκόλακας）がはっきりと姿を現す。また「貧しき芸術家 Πτωχός καλλιτέχνης」では宴会で歌っていた人物が幽霊だったことが後に判明する。

間徘徊するという噂が語られた後、その夜語り手の夢が挿入され、村をさまよう友人の影を見かける。**4「亡霊の戦い」**ではある老人が幼年時のトルコ人との戦いの記憶を語り聞かせるが、その中に老人自身の見た夢が挿入される。夢の中ではギリシャ兵とトルコ兵が戦っているが、一切音がせず映像だけで、老人は岩と化したかのように動けず、ただ見守り続けるしかない。

どちらの作品も、語り手が聞く伝承に続いて夢が挿入され、全ての語りが同一地平にあるような錯覚さえ起こさせて、現実が揺らいでいく。ヴティラスは他の作品でも《夢》を頻用し[7]、このような揺らぎをじわじわと生み出していく。

また、《夢》の場合と完全には分かちがたいのだが、目を覚ましている登場人物が白昼夢を見る《幻視》の類がある。表題作の **9「死の船」**では、死に取り憑かれた家で、病床の母を看病する主人公の目前に船の幻影が出現し、死へと招く。

C：《夢》にしろ《幻視》にしろ、その前後では日常のリアルな場面が描かれるのでとりあえずは現実ではない、と読者は判断する。しかし、そのような枠組みを欠き、《夢》や《幻視》の内容をまるごと読者に差し出す作品もある。沈黙と黴（かび）と腐臭に満たされた故郷を吸血鬼のような蒼ざめた人間がうろつく **6「呪いの町」**や、すでに故人である父とともに墓場をさまよううちに、別の死者をも目にする **11「霊の工房」**などがその例である。

こうして、夢かまことか定かならぬ不条理で戦慄の物語がむき出しで読者の前に置かれることになる。このタイプを《心象風景》と呼んでおきたい。

D：最後に、以上の三グループに比べると異質に感じられる作品群がある。これらは「異界」のもたらす超自然要素を含むようには見えない。

嵐の海を静めるために船乗りたちが甲板の神父を海へ放り込む **1「海へ」**は次章で論じる《捨象化》の極致のような作品であり、《異界》ではなく、まさに現世の人間の悪意がむき出しにされている。キリスト教というか、既存宗教への疑念があるのかもしれない[8]。**5「いつか来る復讐」**は日頃パワハラの親方に虐待されてきた主人公の怒りが暴発し復讐に終わる残酷な物語であり（《復

[7] ヴティラス作品における《夢》の重要性については、コスティウ「ヴティラスのアイロニー」で《夢》と状況的アイロニーとの関係から論じられている（Κωστίου, 1998:20）。

[8] 『死の船』収録作ではないが、「神父の悪行」（1900 年）という作品では神父がまさに復讐の犯罪を犯している。

讐》もこの作家がよく使うモチーフ[9]）、所収作品の中で、無産階級の抑圧とその結末という《社会派ドラマ》の要素がもっとも濃い作品と言える。主人公がルサンチマンを爆発させるきっかけも、ある集会で金持ちや既存の制度を攻撃する演説を聞くうちに過激な思想に感染した結果とされている[10]。**8「運命の手」**は守銭奴の家に入った強盗が見つかり、家主と格闘になるクライムストーリーであるが、自分は復讐の運命（モイラ）の代理人だという強盗の妄執が 5 と共通している。**10「黒い衣服」**は葬儀屋に身を隠した人物たちがショッキングな秘密に気づいて激怒するという、筋だけでは魅力を伝えがたい作品である。葬儀屋の細部が描かれながら、謎めいた話が進み諧謔的な雰囲気さえ醸し出す。

以上をまとめてみよう。

4 つのタイプは程度の差はあれ、いずれも畏怖・恐怖・戦慄を引き起こす物語であることは間違いない。これこそが編者ツォコプロスが 13 篇をひとまとめのアンソロジーとした根拠であろう。

しかしながら、その感情を喚起させる根源に目を向けてみると、異種のものが混ざっている。

グループ **A〜C** に含まれる作品は、登場人物の体験、あるいは《夢・幻視》を通して超自然の存在、異界との接触を暗示し、戦慄の雰囲気を醸し出す。

これに対してグループ **D** は異質である。描かれるのは現実の出来事であり、そこに人間の残酷な心理が差し挿まれて恐ろしい結果に行きつく。超自然的要素が暗示されるわけではない。あくまで現実の残酷譚に主眼があり、その点で、同じ作家の社会リアリズム作品群に接近している。

つまり、各作品が喚起する畏怖・恐怖・戦慄といった感覚には共通性があるが、その源泉に目を向けるならば、超自然の《異界》から現実の人間の残酷な心理まで作品によって異なっている。

下位分類としては、とりあえず以上のようになろう。しかしながら、さらなる問題が残る。源泉という点からは、このように細かく分けられ得るような諸作品が、それでもやはり「幻想暗黒文学」としてまとめられ、ヴティラス節、ヴティラス印というものを感じさせずにはいられないのはどうしてなのだろう

---

[9] ヴァサルダニ「魅力的なテーマ執筆」参照（Βασαρδάνη, 1998:12-13）。「いつか来る復讐」と並んで、何気ない壁のいたずら書きが傲慢な同僚たちを怯えさせる「パラルラーマ」や裏切った恋人の家に放火する「追い払われた愛」などが例として引かれている。

[10] 復讐が爆発する最終シーンの試訳を本稿末尾に付しておいた。

か。ヴティラスはどうやって「《驚異》と《超自然》を隔てる空間を軽々と飛び越える」（Roussel, 1923）ことができるのだろうか。

最後に、多様でありながら統一感を生み出すその理由を考えてみたい。

2.4. ヴティラス作品の革新性

ヴティラス作品の革新的な特徴として、取り扱うテーマの点で言えば、クセノプロスが述べているように（上記 1.2.）、村落の暮らしの描写から都市の小市民・労働者階級の（ペシミズム・デカダンスをこめた）描写へということになるだろう。

他方で、文学上の技法や視点といった点では次のような指摘がなされている。

① 捨象化 (Μπασκόζος, 1999:21)
② 心理的リアリズム (Μαραγκόπουλος, 1998:23, Μπασκόζος,1999:23)
③ アイロニー (Κωστίου, 1998:18-20)

本稿ではこのうち、①バスコゾスの指摘する「捨象化 αφαιρετικός」（または「暗示性 υπαινικτικότητα」）に注目したい。筆者自身がヴティラスの作品を読んでいて独特であると感じるのもこの特徴だからである。

バスコゾスが指摘するのは、特にプロットの面であり、「ヴティラスは古典的なリアリズムの何を変えたのか？　まず、捨象化である。彼のリアリズムは（中略）『語りつくす εξιστορήσει』のではなく、『暗示する υπέδειξε』のである。ヴティラスはテーマを、始まり・続き・終わりのように常識的に展開させず、素早く簡潔で濃縮された筆致によって自分が感じたように事物を伝えようとする」 (Μπασκόζος, 1999:21)

このように、プロット展開の中で（極端な例としては、報道文のように）実際の情報をすべて開示するのではなく、書き手が伝えたいことだけを表現し、残りは完全に削除するか暗示にとどめる、というのがヴティラス文体の重要な要素だという点に筆者も同感である。既に 1920 年にクセノプロスは、読者は細々した謎を自分で推測せねばならないが、比較的明確に語られた箇所に至って安心し、その後謎が解かれたものと感じて満足感を得る、と指摘している (Κουνενάκη, 1998:24)。別の言い方をすれば、作家の側にはストーリー全体を細部に至るまで客観的に示そうという意図がない (Μπασκόζος 1999:17)。

だが、筆者は他の多くの叙述の対象もまた、作品の中で「捨象化」されている点を指摘したい。例えば「時空設定、固有名、人間関係、因果・目的・結果

関係」などである。プロット上の「始まり・続き・終わり」は「因果関係」あたりに入ると思われるが、登場人物がなぜそんな行動をとったのか、その出来事は彼の意図したことなのか、にわかには判断できないことが多い。いつどこで、という「時空設定」はたいてい曖昧にされてるし、人名についても、奇妙な名前が用いられたり[11]、物語の中ほどあたりでようやく主人公の名が明かされる作品さえあり、固有名の扱いがぞんざいだと感じられることも多々ある。

「異界の暗示」や「夢」を利用した作品ではもちろんだが、「社会派リアリズム」作品においてさえ、「捨象化」が効果的に使われて、ヴティラス作品の統一的な印象を生み出すことになっているのではないだろうか。つまり、**D** グループも、狙いは現実界で起きる不安・恐怖・戦慄ではあるのだが、現実の構成要素を「捨象化」することにより、日常風景が非現実的、幻想化していくのである。**1「海へ」**は《異界》の出来事ではないけれども、いつの時代、どこの海とも知れず、船・神父がどこに向かっているのか全く分からない。黒衣をまとう人物を犠牲に差し出せば嵐が収まる、などというのも現実世界の理屈に叶ってはいない。さらにその後神父がどうなったのかも一切語られない。読者が求めるだろう情報を削り捨てて供される物語は、全体が揺らぎ続ける流動的で不安定な幻想めいた現実である。

こうして、作家はモチーフに対する「捨象化」（いわば引き算）の度合いを自由に上げ下げすることで、現実と幻想の間隔を「軽々と飛び越える」。ここに統一的なヴティラス節、ヴティラス印の秘密のひとつがあるのではないか、と筆者は考えている。

3. 結語にかえて

本稿はヴティラスの多様な諸作品を貫徹し統一感を感じさせる特質を、「幻想暗黒文学」と「社会的リアリズム」の関連から考察した。

ヴティラスの「幻想暗黒文学」の作品群は「不安・恐怖」の心理の流れを描出することが眼目であり、その源泉（異界の魔物・幽霊なのか、それとも現実世界の残酷なのか）や異界の実在性（異界がどの程度存在すると信じているのか）には関心がない。その描出に有効な表現方法として「捨象化」が頻繁に用

[11] 奇妙な人名の一例を挙げると、Βίγγας, Ζούμης, Κολίρας, Κούρμας, Λάμπας, Μαλάς, Μαρούκας, Μούρδας, Νεράτζας, Ντάμης, Παδούλης, Πανάρας, Σακίδας, Σαμούλης, Φαρδάκης, Φαρούγκας, Φούδας, Χουλίδας。マランゴプロスも「異様な名前」としてこの点に触れている（Μαραγκόπουλος, 1998:）。

いられており、これによって物語はその下位分類を超えて、絶えず不安定性な揺らぎを感じさせる。こうして、どの作品もまぎれもなくヴティラス作品である印を刻むことになる。

もちろんヴティラス作品の不思議な魅力は「捨象化」だけではなく、これと密接な関係にある「心理リアリズム」や「アイロニー」など多面的な考察が必要である。これらについては今後の研究課題としたい。

テキスト

Τσοκόπουλος, Βάσιας (επιμ.) (1999) *Δημοσθένης Βουτυράς Άπαντα τόμος Γ', Δ',* Δελφίνι. 【*Άπαντα Γ', Δ'*】

Τσοκόπουλος, Βάσιας (επιμ.) (2009) *Το καράβι του θανάτου και άλλες ιστορίες,* Τόπος. 【*καράβι*】

参考文献

Αλεξίου, Στυλιανός (1990) "Πρωτότυπος διηγηματογράφος", *Αφιέρωμα στον Ι. Μ. Παναγιωτόπουλο,* Κουνενάκη (επιμ.) 6-9.

Βασαρδάνη, Βέρα (1998) "Ελκυστική θεματογραφία", Κουνενάκη (επιμ.) 11-14.

Beaton, Roderick (1994) *An Introduction to Modern Greek Literature,* Oxford UP.

Κουνενάκη, Πέγκυ (επιμ.) (1998) Αφιέρωμα στο Δ. Βουτυρά, Η Καθημερινή Επταήμερο, 8-11-1998.

Κωστίου, Κατερίνα (1998) "Η ειρωνεία του Βουτυρά", Κουνενάκη (επιμ.) 18-20.

Louis Roussel (1923) "Διωγμένη αγάπη κι άλλα διηγήματα", *Κριτική,* τευχ. 7, *Άπαντα Δ',* 443-4.

Μαραγκόπουλος,Άρης (1998)"Η μαύρη γοητεία του Βουτυρά", Κουνενάκη (επιμ.) 20-3.

Μπασκόζος, Γιάννης Γ. (1999) "Εισαγωγή , Η ρευστή πραγματικότητα και ο Δημοσθένης Βουτυράς", *Άπαντα Δ',* 11-28.

Politis, Linos (1973) *A History of Modern Greek Literature,* Oxford.

Ψυχογιού Παναγιώτα (2018/12/24) Διαβάστε Δημοσθένη Βουτυρά, http://www.artinews.gr/διαβάστε-δημοσθένη-βουτυρά.html

Τσοκόπουλος, Βάσιας（2009) "Εισαγωγή", *καράβι*, 11-21.

ロジェ・カイヨワ、三好郁朗訳（1966）「妖精物語からＳＦへ」［東雅夫（2012）『幻想文学入門』筑摩書房, 271-316］.

参考として「いつか来る復讐」の最終場面の試訳を掲げておく。初出はミティリニで出ていた雑誌『曙光 Χαραυγή』第 3 号（1911 年 7 月）で、『世界から遠く』（1921 年刊）に再録。以前の親方や現親方から虐められ続けた主人公パヴリスが最後に怒りを爆発させるシーンである。雨、雷鳴、稲妻など作家お気に入りのモチーフがここでも用いられている。

いつか来る復讐

彼（乱暴なバチカス親方）の姿が見えた。それから一羽の蛾がランプの炎のそばを舞っているのが目に入った。

焼けてしまうぞ！と心の中で言った。まるでこのおれみたいだ。

もう一度バチカスを見た。淡い色の瞳を閉じてソファに寝そべっている。

雨がとどろく中でも掛け時計の規則正しく刻む音が聞こえた。中に時の老人（クロノス）がいて、良き時も悪しき時も司（つかさど）っているかのようだ……

バチカスに声をかけて起こさなければという気になったが、できなかった。こいつは誰なんだ？　バチカスか？　ムラヴァス（以前の粗暴な親方）か？　バチカスとムラヴァスの二つの顔が重なってひとつになってしまい、一方が現れたとたん、残り片方が消えてしまうのだった。

しかし……何か言おうとしたが、頭の中で震えが起き、すぐに例の夢につつまれてしまった。あの夢が姿を現した。

自分は裁き主から処刑人として遣わされたのだ……その瞬間バチカスは恐怖から身を守ろうとするかのように身を動かした。

突然バチカスの目が開いた。

「なんだよ！」

言い終えぬうちにパヴリスは相手につかみかかり、床に叩き落した。

バチカスは抗（あらが）って殴りかえしてきた。ランプを下げてあった家具が拳で倒れ、灯りが消えた。

パヴリスは荒々しく叫ぶと相手を持ち上げ、自身のものとは思えない、誰かに命じられたような勢いで、開いた窓のところまで引きずっていった。轟音が下で響き、さらに敷石に打ち付ける雨水に交じって声が聞こえた。

閃光の中、パヴリスひとりが窓辺に立っていた。それから雷の轟音が家を震わせた。頭上で何かが押しつぶされ、まるで栓が割けたかのごとく雨水が注ぎ始めた……（完）

Wide variety in the short stories of Demosthenes Voutyras, a Prose Writer of the *Generation of the '20s*

Takashi TACHIBANA

Demosthenes Voutyras (Δημοσθένης Βουτυράς, 1872-1958) is regarded as one of the representative prose writers of the *Generation of the '20s* in Greek literature.

He wrote a profuse number of short stories that differ in genre, ranging from urban realism, which depicts oppressed poor inhabitants of a city, to phantastic-dark stories, where a hidden supernatural world intrudes into our real one.

This short paper attempts to discover the kinds of literary techniques of Voutyras that could produce such a wide variety in his works.

Specifically, thirteen short stories selected from *The Ship of the Death* (*Το καράβι του θανάτου),* an anthology of phantastic-dark stories posthumously published in 2009, are examined. The analysis shows that, although a certain number of the stories have a strongly realistic flavor, the writer creates a phantastic-dark atmosphere throughout, using such rhetorical techniques as *abstraction* (*αφαίρεση*) and *suggestiveness* (*υπαινικτικότητα*).

It is also argued that these techniques are often observed throughout his works, including the urban realistic stories, regardless of the genres, to form the characteristic co-existence of realistic and phantastic inclinations in the works of the same writer.